

V. R. フュックスの *Who Shall Live?* に学ぶ

江 見 康 一

1. V. R. フュックスとの出会い

スタンフォード大学の経済学教授であり、同大学メディカル・スクール地域医療学教授を兼ねる V. R. フュックス教授は、日本ではサービス経済論と医療経済学の第一人者として知られている。彼の最初の大著 *The Service Economy* (1968年、江見康一訳『サービスの経済学』日本経済新聞社) において、彼は第2次大戦後1950年代後半に入って、米国の全雇用者の5割以上がサービス産業に従事するようになった事実に注目し、「サービス経済社会」の到来がもたらす経済的インパクトを多面的に分析した。その第3章に「サービスの生産性」についての論述があり、その事例研究の1つとして、Medical Care が取り上げられ、健康水準の計測とか、医療の健康増進への貢献度が分析されている。これらの諸点は、後年の医療経済学の興味あるテーマで、フュックスは、それを医療サービスの生産性という視点から取り上げており、そこに彼の経済学者としての医療分析への切り口が見られる。

このフュックス教授と最初に出合ったのは、1963年ノルウェーのロムで開かれた国際国民所得国富学会であり、彼の提出論文は「米国におけるサービス経済の分析」で、それは1968年の *The Service Economy* への途上の論文であった。この内容をめぐって研究関心に共通性を発見した私は、その後時折り文通をするようになり、そのことがフュックスの *The Service Economy* を翻訳するきっかけとなった。

その後フュックスは、つぎつぎに著作を発表してきたが、最初の翻訳がご縁となって、主要著作はほとんど筆者が訳者ないし共訳者として今日に至っている。それを列挙すると（原著名と訳書名およびそれぞれの出版年のみで出版社名は割愛）、次のとおりである。

- ① *The Service Economy* 1968 (『サービスの経済学』1973)
- ② *Who Shall Live?* 1974 (『生と死の経済学』1977)
- ③ *How We Live* 1983 (『いかに生きるかの経済学』1988)
- ④ *The Health Economy* 1986 (『保健医療の経済学』1990)
- ⑤ *Women's Quest for Economic Equality* 1988 (『新しい女性たちの経済学』1989)
- ⑥ *The Future of Health Policy* 1993 (『保健医療政策の将来』近刊)

2. この一冊— *Who Shall Live?* ?

上に列挙したフェックスの一連の著作活動をフォローしていくと、その中心は「保健医療の経済学」にあるが、彼の分析の視座にはつねに経済学の貢献しうる領域と、経済学を超えて社会的選択に委ねざるをえない領域とを区別して問題を整理していることで、この彼の立場を最も鮮明に、かつコンパクトに示したのが、彼の *Who Shall Live?* である。この題名の直訳は「誰が生きながらえるか」ということで医療資源の配分の問題にかかわる。事実彼は本書の序論で、医療における資源問題の認識を基礎に据えており「医療を含む人間の欲求を最もよく満たすためには、稀少な資源を社会全体にとって最善になるよう有効に配分しなければならないが、そのためには社会的選択が必要になる」として、この基礎的事実を明らかにするために、第1章のタイトルを「問題と選択」として、医療資源の配分をめぐる選択上の基本的問いかけをつぎつぎに行っている。

つぎに第2章ではマクロ的な社会・人口学的変化を背景に、死亡率に象徴される健康問題が、乳児から老年期までの各ライフ・ステージでどのような特性を示しているかが明らかにされるが、この部分をさらに詳細に展開したものが、フェックスの著書の③に掲げた『いかに生きるかの経済学』である。

このように彼は保健医療の問題を、基本的には国民生活にとって同様に必要な他の諸分野への資源配分との社会的選択という視点を考慮に入れ、また健康問題を、生まれてから死ぬまでの生涯にわたって展望し、ライフステージごとに生じる人口学的イベントや地域特性とのかかわりで考察している。このような背景を踏まえたうえで、医療固有の問題に転じ、治療と介護、病院の機能特性、薬と倫理、医療費と制度機構とのかかわりなどについて、手順よく、しかも問題点を明確に摘出して、米国の医療経済の直面する問題と解決の方向を示唆しており、同書から教えられるところはきわめて大きい。

著作③は、*Who Shall Live?* を一層発展させたものであるが、社会保障研究をする立場からは、*How We Live* のほうがより有益だろう。というのは、人生の諸段階で人々が遭遇する諸問題について、その時に社会保障を含む公共政策はどのような関与の仕方をするのが望ましいかが論ぜられているからである。日本でも社会保障研究の分野で、今後はフェックスのような幅広い総合的研究の出現が強く期待されよう。

(えみ・こういち 帝京大学教授)